愛知工業大学研究報告
第38号A平成15年

ウェールズ再発見
（その6）
ジョージ・ボローと『ワイルド・ウェールズ』

Wales Rediscovered
– Part 6 –
George Borrow and *Wild Wales*

吉 賀 憲 夫
Yoshiga, Norio

Abstract Though he is almost forgotten today, George Borrow was a novelist who was as popular as Dickens and Thackeray. He wrote biographical and picaresque novels such as *The Bible of Spain* and *Lavengro*. But today his fame seems to rest with his travel book, *Wild Wales*. Stemming from his strong enthusiasm for everything Welsh, he made a tour of Wales on foot in 1854.

Wild Wales is a unique guidebook compared to earlier travel books such as Thomas Pennant's *A Tour in Wales*. *Wild Wales* is a biographical travel essay on Wales. In the book, we can see George Borrow as a staunch Anglican who scorns Methodists and teetotalers. We learn he is an extraordinary walker and lovers Welsh poetry as well as ale. Borrow depicted the mid-nineteenth century Wales and its people vividly and successfully. He could immortalize the beautiful country and it poor but warm-hearted people in *Wild Wales*.

1

小説家であり、旅行家であり、数多くの言語に堪能であったジョージ・ボロー(George Henry Borrow:1803-1881)は、1803 年7月5日にノーフォークのイースト・ディアハムに生まれた。父親はコーンウォールの出身で、兵卒から昇進し、西ノーフォークの民兵団の大尉となった。その司令部があったイースト・ディアハムで、彼は女優のアン・パーフレメントと結婚し、次男としてジョージ・ボローが誕生した。父親は兵士募集のため、イングランド、スコットランド、アイルランドを巡った。その父親に伴い、家族も各地を転々とした。兄とジョージはその赴任先で教育を受けたが、1816 年、ついに家族はノリッジ(Norwich)に落ち着いた。彼はノリッジのグラマースクールに、学費の払えない学生を救済するための「学費免除生」として通ったが、そのことは劣等感を彼に植え付け、そのため学校を嫌うようになった。しかし、学校の外ではスペイン語やイタリア語を勉強し始め、さらにはジプシーの友達からジプシー語を学んだ。

15 歳のとき神経衰弱に陥り、その後もしばしばその症状に悩まされることになる。17 歳の時、ノリッジの事務弁護士の所で、5 年間の事務弁護士実務修習生として働いた。しかし、法律には身が入らず、言語や文学の道に励んだ。ボローはこの時期にウェールズ語を学ぶ。彼が実務修習生として勤めて

いた事務所の弁護士は、書物やスウィードという名のウェールズ人馬丁からウェールズ語を学んでいた。そのウェールズ人は 47 歳ぐらいの男で、事務所の近くに住んでいた。弁護士事務所のボローの同僚たちは、「タフィはウェールズ人、タフィは盗人。タフィは家に来て、牛肉、盗んだ」というウェールズ人いじめでお馴染みの童謡を歌い、その男をからかった。ウェールズ語を学びつつあったボローは、同僚たちにそのウェールズ人をからかうことを止めるように説得し、ボローもまたそのウェールズ人から日曜日の午後、ウェールズ語を学ぶようになる。そのときの自分のウェールズ語力に関して、ボローは自著『ワイルド・ウェールズ、人と言語と風景』*(Wild Wales, Its People, Language and Scenery)*に次のように記している。

本を訳すことは、もうすでに、ある程度自分でできるようになっていた。彼（ウェールズ人）が最初にやって来たとき、彼も認めたのだが、ウェールズ語を読む力は、私の方が上であることがわかった。しかし私は彼からウェールズ語の発音を習い、ウェールズ語会話を少し習った。(『ワイルド・ウェールズ』、23 頁)

ウェールズ語のレッスンは、そのウェールズ人が故郷のウェールズに帰るまで１年間続いた。音声面での指導者を失った後は、彼は再び独力で本からウェールズ語を学んだ。その本とは 1819 年にウィリアム・オーエン・ピュー(William Owen Pughe:1759-1835)により出版されたミルトンの『失楽園』(Paradise Lost)のウェールズ語訳『コス・グウィンヴァ』(Coll Gwynfa)であり、彼はそれを二度読んだという。このようにして彼は、ウェールズ語の散文だけでなく、非常に難しいといわれるウェールズ語の詩、特に中世ウェールズの大詩人ダヴィッズ・アブ・グリフィズ(Dafydd ab Gwilym:ff.1340-1370)やゴロヌウイ・オーエン(Gronwy Owen:1722-1780?)の詩まで読むことができるほどになった。

1824 年、父が死ぬと、彼は語学を活かす道を求めて、彼が翻訳したウェールズ語やデンマーク語の詩の原稿および紹介状を携え、ロンドンに出た。しかしそれらは省みられることがなかった。彼は 15 世紀から 19 世紀に至る有名な裁判を 400 件以上集めた『著名なる裁判』の編集に低賃金で携わった。この本は1825年に出版された。

その後、彼はロンドンを離れ、イングランドおよび大陸を放浪する。1826 年にはノリッジで、彼がデンマーク語から翻訳した『ロマンティック・バラッズ』の出版したが、しかしこの本は人々の注目を集めることはなかった。その後も、幾つかの出版を試みるが、出版社から拒絶されてしまう。

彼に運が向いてきたのは 1833 年になってからのことであった。海軍士官の未亡人メアリー・クラーク夫人が、サフォーク州ローストーフト(Lowestoft)の牧師フランシス・カミンガムに言語学者としてボローを紹介してくれ、その牧師はボローを英国内外聖書協会(The British and Foreign Bible Society)に推薦する。

ボローはその聖書協会から、新約聖書の満州語翻訳を委託された。彼は３週間で満州語を学び、満州語の試験に合格し、翻訳をするためにロシアのペテルスブルグへ向かった。そこには清国政府の出先機関があり、またペテルスブルグの図書館では、満州語翻訳のための貴重な図書が利用できたからであった。彼は２年間の滞在で、満州語新約聖書を完成させた。

1835 年に帰国すると、すぐに彼はスペインに派遣され、４年半をそこで過ごした。ボローに活躍の場を与えてくれたクラーク夫人とは、手紙による交際が続いていたが、そのクラーク夫人と夫人の娘ヘンリエッタが、セビリアの彼の許を訪ねた。1840 年４月 16 日、彼ら三人はともに帰国し、４月 23 日にボローは７歳年上の裕福なクラーク夫人と結婚した。ボローはローストーフトの近くのオルトンにある夫人の地所に落ち着いた。

ボローが 1841 年に出版した彼の旅と経験に基づく『ジンカリ、あるいはスペインのジプシーについて』(*The Zincali*)とその翌年に出版した『スペインの聖書、あるいはイベリア半島で聖書販売を試みる一人のイングランド人の旅と冒険と投獄』(The Bible in Spain)は大成功を納め、彼の名はディケンズやサッカレーと同じほど有名になった。

『スペインの聖書』の成功を受けて、彼は 1851 年に『ラベングロ』(*Lavengro*)、1857 年に『ジプシ

一紳士』(*The Romany Rye*)を出版した。「ラベングロ」とはジプシー語で「言葉の達人」を意味し、ボロー自身を指している。これからもわかるように、これらはすべて自叙伝的作品であり、また悪漢が活躍するピカレスク小説の流れを汲むものであった。『ラベングロ』はボローの代表作と考えられているが、世評は前作ほどではなかった。『ジプシー紳士』に至っては、さらに冷ややかなものであった。このことが『ワイルド・ウェールズ』の出版を慎重にさせ、なおかつ遅らせた原因となった。

1853 年、ボロー一家はグレート・ヤーマスに移り、さらに 1860 年にロンドンへ転居した。『ワイルド・ウェールズ』は 1862 年に出版された。しかしこの旅行記も決して好評ではなかった。ウェールズ旅行自体がもう色褪せた主題であったからである。1865 年1月にボロー夫人メアリーは死亡した。彼はその後5年間ロンドンに留まったが、オルトンに戻り、そこで 1881 年7月 26 日に死亡した。そのときには、かつてはディケンズと同じようにもて囃されたボローも、もう事実上世間から忘れられた存在であった。

『ワイルド・ウェールズ』は彼が 51 歳の 1854 年7月 27 日から 11 月 16 日までのウェールズ徒歩旅行に基づいて書かれたものであった。何故この時期にウェールズ旅行をすることになったかという理由は『ワイルド・ウェールズ』第1章冒頭に記されている。ボロー一家はイースト・アングリアの彼らの地所での生活に倦み、転地旅行を計画した。旅行先として、ボローはウェールズを、妻メアリーと娘ヘンリエッタは当時鉱泉保養地として有名であったウォーリック州のロイヤル・レミントン・スパ(Royal Leamington Spa)や、北ヨークシャー州のハロゲイト(Harrogate)を希望した。ボローは、妻や娘が言うような流行の場所は出費が恐ろしくかさむと難色を示した。妻の方は、近年、穀物の値段が驚くほど安いので数百ポンドの節約ができ、したがってファショナブルな生活を垣間見る余裕はあると切り返した。そこで彼は、流行の生活など嫌悪をもよおすが、決して自分は利己的な人間ではないので、嫌悪感を抑え、ハロゲイトであろうと、レミントンであろうとついて行くと言った。これが功を奏し、妻と娘は、もはや流行ではないウェールズ行きに同意したという。ボローがウェールズ語が話せるというのも、大きな理由の一つであった。

1854 年7月 27 日、ボローは家族とともに汽車でイリー(Ely)を発ち、ウェールズに向かった。チェスターからは、メアリーとヘンリエッタは、ボローよりも一足先に列車でスランゴスレン(Llangollen)に向かった。ボローはその1日後、徒歩でウェールズ国境を越え、8月1日にスランゴスレンに着いた。スランゴスレンがボロー一家のウェールズでの滞在先であったが、彼はそこに約1ヶ月滞在し、近郊のヴァレ・クルキス大修道院(Valle Crucis Abbey)やリスウィン(Ruthin)の町を訪ねたあと、妻と娘を残し、北ウェールズ徒歩旅行に出かけた。一方妻と娘は、あらかじめ決めておいた日時に列車でバンゴールへと赴き、ボローと落ち合い、スノードンに行く。再び妻子は列車でスランゴスレンへ戻ったが、ボローはさらに徒歩でアングルシーのホーリヘッドまで行き、帰りはベズゲラート(Beddgelert)、フェスティニオッグ(Ffestiniog)、バラを経由して、9月上旬にスランゴスレンへ帰った

妻メアリーと娘ヘンリエッタがイングランドへ戻って行った後、10 月 21 日にボローは単身、南ウェールズへ向かった 11 月 16 日、ボローは長い南ウェールズ旅行をチェプストーで終え、チェプストー駅で列車に乗り込み、ウェールズを後にした。

2

ボローは彼のウェールズ旅行記に『ワイルド・ウェールズ』という書名をつけた。「ワイルド・ウェールズ」とは、中世ウェールズの大詩人タリエシン(Tliesin)の詩を彼自身が英訳した一節に現れる語句である。彼は『ワイルド・ウェールズ』、第5章で、タリエシンによるブリトン人とサクソン人の運命の予言を次のように翻訳している。

とぐろを巻き、怒りに燃え、
武装した翼を広げ
ドイツよりやって来る毒蛇は
広大なブリテン島を
ロッホリンの海からセヴァーンの岸まで

征服し、隷属させるであろう。

そして、そのときブリトン人は
ザクセンの浜からやって来た
よそ者の囚人となるだろう。
ブリトン人は神を褒め称え、
彼らの古い言葉を保つが、
荒々しいウェールズを除き彼らの土地を失うであろう。
(『ワイルド・ウェールズ』、39頁)

「ワイルド」を「荒々しい」と訳したが、「ワイルド」には「手に負えない」、「荒れ狂う」、「飼い慣らされない」、「野生の」、「すばらしい」などの意味がある。ボローがこの本のタイトルに込めた意味は決してただ一つではなく、多重であり、オーバーラップしている。ただ皮肉なことは、ボローが旅行した時点のウェールズは、もう決して「ワイルド」ではなくなっていたことである。18 世紀までのウェールズであれば、そういえるかもしれない。しかし 19 世紀半ばのウェールズは「すばらしい」という意味であるならばともかく、もう決して「人間の手に負えない」、「荒々しい」、「野生の」土地とはいえない。ホーリーヘッドまで汽車が走るご時世なのである。しかしボローは敢えてこの文明の利器を利用せず、50 年前主流であった徒歩でわざわざウェールズを旅行した。徒歩に関するもっとも象徴的な行為は、イングランド・ウェールズ国境を越えるとき彼が選んだのは、汽車ではなく、徒歩であったという事実である。彼は妻子をスランゴスレンまで汽車で行かせたにもかかわらず、彼自身は汽車を利用せず、敢えて徒歩で国境を超えたのであった。この少々センチメンタルな行為は、ボローのウェールズに対する旅行者としての立場を象徴しているのである。

ウェールズ旅行記を残した歴代の著名な旅行家は、まだ知られることのなかったウェールズの歴史、文化、そして美しい自然というものに焦点を当てた。それらの旅行記は、主にイングランド人の旅行者を魅了した。ウェールズ旅行はひとつのブームとなった。しかしボローの時代にはもう既にウェールズ旅行の魅力は色褪せ、人気のある場所はボローの妻子が最初に希望したような、鉄道で簡単に行ける当時流行のハロゲイトやロイヤル・レミントン・スパといった鉱泉保養地であった。したがって 1854 年にウェールズ徒歩旅行をしたボローは、明らかに「遅れて来た」旅人であった。その彼が書くウェールズ旅行記は、従来のものと同じ系列のものであってはならなかったし、実際彼は同じものは書かなかった。

ボローは文学者であった。それもウェールズ語が話せ、ウェールズ文学にも造詣が深かった。このことは、彼の旅行自体の性格を決定づけた。彼のウェールズ旅行の大きな目的のひとつは、彼が敬愛してやまない過去の偉大なウェールズの詩人たちの足跡を訪ね、生家や墓に詣で、彼らの業績に敬意を払うことであった。次にウェールズ語を話せるボローは、ウェールズ人と直接話をすることにより、ウェールズ人の目線で、彼らの生活や暮らしを描こうとした。

彼の『ワイルド・ウェールズ』が南ウェールズをカバーしているのも特徴のひとつであろう。驚くべき健脚にまかせ、彼は足を南ウェールズにまで運び、ややもするとウェールズ旅行から切り捨てられる地域を旅し、貴重な記録を残している。面白いのは、これらすべてが、良くも悪くも個性溢れるボローの目を通して描かれていることである。そこには彼の優しさも表れているが、明らかな偏見も入り交じっている。それも時として、濃厚に漂っているのである。したがって、この本から浮かび上がってくるボローその人の人となりも大変興味深いものがある。そのような意味で、ボローの『ワイルド・ウェールズ』はそれまでのウェールズ旅行記とは一線を画す、新しいウェールズ旅行記なのである。

『ワイルド・ウェールズ』の中でもっとも印象的なボローの旅は、ケイリオッグ(Ceiriog)の谷にあるケイリオッグのナイティンゲールと呼ばれた詩人ヒュー・モリス(Huw Morys:1622-1709)の「椅子」に詣でたことと、アングルシーのゴロヌウイ・オーエン(Goronwy Owen:1722-1780?)の生家への旅であろう。ボローとその家族はスランゴスレンに腰を落ち着け、ボローはそこを中心に四方八方に足をのばし、念願のウェールズの地を満喫していたが、ある日彼はガイドのウェールズ人ジョン・ジョーンズとともに、スランゴスレンの南にあるポント・ア・メイビオン(Pont y Meibion)のヒュー・モリスの生地を

目指した。ボローはその数日前に、そこにヒュー・モリスが座ったという石の椅子があることを聞き、それを見たいと思ったからであった。

ボローとガイドのジョン・ジョーンズはヒュー・モリスの石の椅子の場所を知っているというジョーンズの叔母を訪ねた。叔母は娘に彼らをそこに案内するように言った。その娘を先頭に、ボローは雨の中を、ずぶ濡れになりながら、灌木とイラクサが生い茂る場所を苦労して石垣に沿って進んだ。30 分も歩いたが、その椅子は見つからなかった。娘は場所を間違えたことに気づき、彼らは引き返した。戻ってきた一行を見て叔母は驚き、椅子は反対の方向であると言い、自ら案内した。同様の苦労を重ね、彼らはついに椅子の前にたどり着いた。そのときの様子をボローは次のように記している。

私は列の最後にいた。しかし今や私は前にいたジョン・ジョーンズを追い抜き、次にその老婦人を追い越した。石垣の所に彼の椅子はあった。140 年前に彼は静かな教会墓地に埋葬されたが、当時も今も、彼はウェールズの山に住む人々にエオス・ケイリオッグ(Eos Geiriog)、すなわちケイリオッグのナイティンゲール、美しい歌を歌うヒュー・モリス、チャールズ一世と英国国教会の熱烈な支持者、クロムウェルと独立派教会に対する徹底した風刺家と呼ばれている。その椅子は、西に面した古い道路の石垣の窪みの中にあった。その道路の下は小渓谷となっており、その底にケイリオッグの小川がさらさらと流れている。その椅子は庭にあるような樽を半分にしたようなもので、座部は石の板、背部は大きなスレート板であった。そのスレート板には詩人ヒュー・モリスを意味する H ・ M ・ B の文字が刻まれていた。(『ワイルド・ウェールズ』、111～2 頁)

その椅子に座るように勧められたボローは帽子をとり、その前に立ち、次のように述べ、ヒュー・モリスへの敬意を表した。

ヒュー・モリスの霊よ。あなたの霊は生前あなたの愛した場所に現れるものと思います。とぐろを巻く毒蛇の子孫である 1 人のサクソン人が、常日頃から思っていたように、真の天才に敬意を払うためにこの地にやって参りました。その男は鳶色の髪の少年のとき、イングランドのもっともはずれの地域でケイリオッグのナイティンゲールの詩を読みました。今その少年は白髪の頭となり、あなたの詩が彼の目をしばしば歓喜の涙で溢れさせたことを告げに、この地にやって来たのです。(『ワイルド・ウェールズ』、112 頁)

この後、ボローはモリスの詩を口ずさみながらこの椅子に座ったのであった。

3

ボローのもうひとつの巡礼の旅に移ろう。ボローはバンゴールで予定通り、妻と娘に落ち合い、娘ヘンリエッタとスノードン山登頂を果たした。しかし翌日からは、再び妻子とは別行動ととることになる。メアリーとヘンリエッタはスランゴスレンに戻り、ボローは詩人ゴロヌウイ・オーエンの生家を訪ねる念願の旅を始めた。

ゴロヌウイ・オーエは古典的技法で詩を書いた、ウェールズの生んだ最後の偉大な詩人であった。ボローは『ワイルド・ウェールズ』第 30 章のすべてをゴロヌウイ・オーエンの伝記に当て、この不遇の天才詩人の生涯を世に伝えているが、ボローによるゴロヌウイ・オーエンの青年期までの記述は、少々不正確である。

彼は 1722 年にアングルシーのスランヴァイル・マサヴァルン・エイサヴ(Llanfair Mathafarn Eithaf)で生まれた。彼は 10 歳のときスランアスゴ(Llanallgo)の学校に通う。1734 年、または 1735 年にプースヘリ(Pwllheli)の無料学校に入った。1737 年、バンゴールのフアイアーズ学校に入学し、校長エドワード・ベネットと助教のハンフリー・ジョーンズの指導で古典を勉強した。1742 年、彼はオックスフォード大学ジーザス・コレッジに学費給費生として入学許可されたが、大学には二週間いただけで後は出席せず、1742 年から 1744 年まではプースヘリの無料学校で、また 1745 年にはデンビーの学校で助教師をしていた。1746 年に聖職者となったが、安定した代理牧師職がなく、貧しい生活を強いられた。ついに彼はウェールズで代理牧師となることを諦め、

イングランドのオズウェストリやドニントンで代理牧師や教師をした。この時期に彼の傑作「最後の審判」(カウィッズ・ア・ヴァルン・ヴァウル) (Cywydd y Farn Fawr)が書かれている。その後ロンドンのウェールズ人会カムロドリオンを頼り、ロンドンに出たが、思うに任せず、ここでも貧困生活を送った。1757 年、カムロドリオンの紹介で、アメリカのヴァージニア州ウィリアムズバークのウィリアム・アンド・メアリー・カレッジ付属のグラマースクール校長職を得、アメリカに渡る。しかし悲劇は続く。航海中に彼は妻と娘を亡くし、ウィリアム・アンド・メアリー・カレッジの学長の娘と再婚するが、またもや妻と死別してしまった。このようなことがもとで、彼は酒に溺れ、その職を失ってしまう。その後、ヴァージニア州ブランズウィック郡セント・アンドリューの聖職録を得、そこで生を終えた。彼の人生は、今日の彼の詩人としての名声からは想像もつかないほど恵まれない悲惨なものであった。

ウェールズの穀倉と呼ばれたアングルシー島は肥沃な土地として有名であった。しかしその肥沃なアングルシーの風景はゴロヌウイ・オーエンの生まれた村スランヴァイルに近づくにつれ、不毛の荒れ地に姿を変えていった。ボローは憂鬱感に襲われた。

私は心の中で呟いた。「ここがゴロヌウイ・オーエンの生まれた所なのか。このような惨めな地域で生まれたのであれば、彼が生涯を通して不幸であったのも決して不思議ではない。」

その地域は確かに惨めに見えた。しかし私はすぐに親切な人々が私のすぐそばにいることに気付いたのである。(『ワイルド・ウェールズ』、173 頁)

ボローは貧しい粉屋の夫婦に会い、温かいもてなしを受ける。ウェールズ人の見知らぬ人を歓待する風習はギラルドゥス・カンブレンシスも『ウェールズ素描』に記しているが [1]、ボローも古来からのウェールズ人の心温まる歓待を受けたのであった。彼は感激し、涙を流した。

私の目は涙に溢れた。なぜなら私のこれまでの全人生において、このような正真正銘の歓待を受けたことは決してなかったからである。このモナ(アングルシー)の粉屋とその妻に誉れあれ。すべての優しく温かいケルト人に誉れあれ。このさげすまれた民族の、見知らぬ旅人に対する歓待はなんと他の民族のそれとは違うことであろうか・・・。私はサクソン人だ。そしてサクソン人にも美徳はある。しかし悲しいかな、それらの美徳もきっと、ぎこちなく、ありがたく思われないものであるのだろう。(『ワイルド・ウェールズ』、175 頁)

ボローは感極まり、涙を流しこの歓迎を受け入れた。粉屋との話はゴロヌウイ・オーエンの詩に及んだ。ゴロヌウイ・オーエンの詩を読むことができるかという質問に対し、その粉屋はできないと答え、「彼の詩は古いウェールズ語の韻律で書かれています。それが詩を難しくしている。それで彼の詩を理解できる人はほとんどいません」[2]と言った。

ボローはこの親切な粉屋の家を辞し、ゴロヌウイ・オーエンの生家に向かった。その家には老婆と数人の子供がいた。彼がウェールズ語で話すと初めて老婆は、ボローがゴロヌウイ・オーエンの生家を訪れるためにやって来たことを知る。その生家は「ゴロヌウイ・オーエンの家」と呼ばれている長屋であり、三軒からなるこの長屋の中央がゴロヌウイ・オーエンの生まれた場所であった。天井はなく、屋根がむき出しの粗末な家であった。そこにいた子供たちはゴロヌウイ・オーエンと同じ血が幾ばくか流れているという。すなわち彼の母方から3代の子孫に当たるとのことであった。ボローは子供に字は書けるかと尋ねた。8歳ぐらいの、のっぺりとした赤ら顔で、灰色の目をした、ずんぐりとした女の子は、ボローの手帳にウェールズ語で"Ellen Jones yn perthyn o bell I gronow owen." (ゴロヌウイ・オーエンの遠い子孫エレン・ジョーンズ)と書いた。3) ボローはその女の子のエレンという名に感激し、この子供たちがゴロヌウイ・オーエンの縁者であることを確信する。なぜなら、エレンという名はウェールズでは珍しく、またゴロヌウイの亡くなった娘の名前であったからであったからであった。少々乱暴な推論であるが、ボローのゴロヌウイ・オーエンに対する想いが伝わってくるエピソードである。

4

ヒュー・モリスとゴロヌウイ・オーエンに関するこれら２つのエピソードからもわかるように、『ワイルド・ウェールズ』は現代の旅行記の姿により近い。著者というものが全面に出て、その著者の自伝的要素までも見え隠れしている。地誌に関する情報提供というよりも、随筆という感すらする。そこがペナントの旅行記とは大きく違うところである。またこの２つの記事を読む限り、すべてが実際にあったことか、どこまでが真実で、どこからが虚構なのかわからない部分もある。

この旅行記には著者の性格というものが色濃く反映されている。それは時に、彼の態度やものの見方にも影響を与えている。熱心な英国国教会の信徒であるボローは、ウェールズにおける有力なカルヴァン主義メソジスト教会に対し非寛容な態度に終始する。彼はチェスターで国教会のミサに出席した後、メソディストの野外集会を見物に行った。そこには2000 人ぐらいの群衆が集まって、12 人のメソディストの説教師が順番に説教を行なっていた。50 歳ぐらいの、あばた面で、頭の幾分禿げ上がった男が演説を始めた。内容は粗野で、ジョークは下手で、大声で叫ぶばかりであった。話は絶対禁酒主義に及んだ。その説教師は、魂の敵から逃れたいのであれば、決してパブに酒を飲みに行ってはいけない。水、または紅茶より強い飲み物は喉を通してはいけない。もし悪魔から逃れたいならば、誓いを立て、絶対禁酒主義者になりなさい、と言った。するとボローの後ろに立っていた男が、「酒を飲んじゃあいけねえ、パブには行くなって？大したやつだ。やつは改心したように言ってるが、やっこさん、今でも大酒呑みだぜ。ほんの数日前だぜ、おれはあいつが酒屋からふらついて出てくるのを見たぜ」[4] と言った。話としては面白いが、少々出来過ぎの感もある。そのような例は多々ある。

「国教会の猫」[5]のエピソードもその一つである。ボロー一家のスランゴスレンでの住居「ディー・コテージ」に、骨と皮だけの黒猫が１匹入ってきた。この猫はスランゴスレンの前任の牧師が置いていったものであった。ところが、後任の牧師は犬を飼っていたので、その猫を捨ててしまった。その猫は餌を求めて町を彷徨うが、国教会の牧師に飼われていたため、「国教会の猫（チャーチ・キャット」と呼ばれ、非国教徒から打たれたり、石を投げられたりして迫害されていたという話である。結局この猫は、ボロー一家が飼うことになった。（しかし彼らがイングランドに帰るときは、やはり地元の国教会の信徒に貰ってもらうことになる。）

彼のメソディスト派に関する言及はまだある。アングルシー島をホーリー・ヘッドに向かっていたときのことである。

私が 17 マイル（27.2km）先のペン・カイル・ガビ（Pen Caer Gybi）、すなわちホーリーヘッドに向けて、スラン何とか、という村を出発したときは、午後 4 時ぐらいであった。私はその小さな町の西側の丘の上に達し、そこからまた、どんどんと歩いていった。その田園地帯は貧しく、鄙びていた。私の右側は燕麦の畑で、左側はメソディスト派の礼拝堂（チャペル）であった。燕麦とメソディスト。貧困と野卑のなんとすばらしい象徴であろうか。（『ワイルド・ウェールズ』、208 頁）

次は南ウェールズのスランガドッグ(Llangadog)という村での出来事である。彼がその村に着くやいなや、雨が降り出した。彼は古い旅籠のような建物に飛び込んだ。

広々とした心地よい簡易食堂の赤々と燃える火の近くに中年の女性が１人、巨大なモミ材のテーブルについていた。彼女の前には大きな２冊の本が開かれていた。私は椅子に座り、彼女に英語でエールを１杯注文した。彼女はエールをもってきて、また本の前に座った。尋ねてみると、それがウェールズ語聖書と項目索引（コンコーダンス）であることがわかった。我々はすぐに宗教について話を始めたが、まったく意見の一致を見なかった。何故なら彼女は苦々（にがにが）しいメソディストであった。その苦々しさといえば、彼女がもってきたビールと同じほど苦（にが）いものであり、そのビールも私はやっと半分だけ飲み下すことができた。（『ワイルド・ウェールズ』、467 頁）

宗教的寛容に関して、ボローは失格であったかもしれない。彼はメソディストを嫌悪し、軽蔑するが、ウェールズ人のメソディスト支持は、その背後にウェールズ文化とウェールズ語を守ろうとする共通の意識があることをボローは見逃している。ことは信仰の問題ではあるが、これらの例に見られるボローと、ヒュー・モリスの石の椅子の前で讃辞を述べるボローとの間には大きな隔たりがある。とはいえ、これらの記述は、逆に一九世紀半ばのウェールズにおけるカルヴァン主義メソディスト派の浸透ぶりと、その興隆を示しているのである。

5

ボローはこの旅行で彼の健脚ぶりをいかんなく発揮している。彼は乗り物を一切使用せず、すべて徒歩でウェールズを旅行した。1日に歩く距離もさることながら、彼の歩く速度は実に驚くべき速さであった。彼が歩いた距離と速度について知ることのできるエピソードがある。それはケリッグ・ア・ドリディオン(Cerrig y Drudion)からバンゴールまでの行程でのことであった。彼はケリッグ・ア・ドリディオンのライオン亭という旅籠に投宿したが、そこで晴雨計を行商するイタリア人に出会った。翌朝はすばらしい天気であった。ボローはイタリア人に出発するのかと尋ねた。

「はい、セニョール、デンビーに」

「朝食後、私はバンゴールに」と私は言った。

「今晩バンゴールに着く予定ですか？セニョール」

「ええ、そうですよ」と私は言った。

「歩いて？セニョール」

「ええ、ウェールズではいつも歩きますよ」と私は言った。

「ということは、とても長い距離を歩くことになりますね、セニョール。だってバンゴールまでここから34マイル（54.5km）ありますよ。」

（『ワイルド・ウェールズ』、136頁）

デンビーはケリッグ・ア・ドリディオンの北東にあり、バンゴールに向かうには北西に道をとることになる。ボローは精力的に歩いた。彼は古い橋を渡り、美しい谷にある小さな町を通った。ボローはその町の名を挙げていないが、これがスノードニアの有名な町ベトゥス・ア・コイド(Betws-y-coed)であった。「そこにはイギリスのあらゆる地域の優雅なジェントリが、夏に木陰と休養を求めてやって来る」[6] と彼が述べているように、その町はヴィクトリア朝時代においてはウェールズの大変有名な保養地で、ジェントリの他、水彩画家が好んで訪れる場所であった。そこから有名なスワロー滝を見て、さらに彼は歩き続け、カペル・キリッグ(Capel Currig)に着いた。彼は太陽が照りつける日中、20 マイル（32km）歩いたので、そこのホテルで軽食をとった。そこからスノードン山までは6マイル（9.6km）、バンゴールまでは14マイル（22.4km）であった。

カペル・キリッグから1時間歩くと、荒涼とした荒れ地にさしかかった。そこで彼は貧しい2人の子供に出会い、水を飲ませてもらった。彼はまたその子供たちからウェールズの貧しい生活の一端を知ったのであった。それからさらに歩き続け、日が沈みパブでエールを飲み、そのパブを出たときには夜の8時であった。夜になると心地よい涼しさになった。

ベセスダ(Bethesda)に着いた。その町を少し出た所で、ある家から手に籠を持った男が出てきて、ボローと並ぶようにして歩き始めた。ボローは歩くペースを上げたが、その男はすぐに追いついてきた。2人は1マイル（1.6km）ほど、一言も口をきかずに平行して歩いた。しかしついにボローはその男を約 10m 引き離し、振り返り、大声で笑い、英語で男に話しかけた。その男も笑い、ウェールズ語で話しかけた。それから2人は仲良く並んで話をしながら歩いたのであった。バンゴールまでの後1マイル（1.6km）であった。を驚くことに、彼らは 10 分後にはバンゴールに着いたのである。計算すると、時速 9.6km で歩いたことになる。しかもボローはその日既に 54km を歩いた後でである。

ボローはウェールズ旅行で 240 マイル（348km）歩いたとされている。一切乗り物は利用していない。彼は汽車が大嫌いであった。ホーリー・ヘッドに向かって歩いているときに、前方に赤い光が見えた。彼がその方向に行くと、そこは鉄道の駅であった。

駅員が「ホーリー・ヘッド行列車はすぐ来ますよ。ホーリ・ヘッドまで２マイル（3.2km)、運賃はたったの六ペンスです」[7] と言うと、ボローは汽車は大嫌いだと吐き捨てるように言い、もとの道に戻って行った。鉄道に平行した道を歩いていると、すぐに汽車がやって来て、恐ろしい火花を散らし、轟音を立てて彼の左側を追い抜いていった。彼もまた歩く速度を上げた。ホーリ・ヘッドに着くと左手に立派な建物があった。なおも行き、ホテルはどこかと尋ねると、１番の高級ホテルは鉄道ホテルだという。先ほどの立派な建物がそれであった。別のホテルはないかと問うと、あるにはあるが、ひどいホテルばかりだという。ボローは鉄道と名のつくものには泊まりたくなかったが、前日の宿のひどさを思い出し、しかたなく鉄道ホテルに投宿することにした。しかしその間、彼の機嫌はずいぶん悪かった。[8]

ボローの健脚と活力の源は、彼の食事にあったのかもしれない。彼は実によく食べた。彼はアングルシーへの旅からスランゴスレンに帰る途中バラで、馬商人が「ウェールズで最高の旅籠」[9] として勧めてくれたホテルに泊まった。そのバラのホテルの朝食は豪華であった。

私が注文して 20 分すると朝食が出てきた。それは私がどこかで読んだかもしれないが、決して見たことのない立派な朝食であった。お茶とコーヒー、美しい白パンとバター、卵２つにマトンチョップ二つ。焼いた鮭に酢漬けの鮭。フライにした鱒。瓶詰めの鱒や海老もあった。(『ワイルド・ウェールズ』、264 頁)

当時のウェールズでの宿泊費と食事代は驚くほど安かった。『田園の創造』の著者ドンナ・ランドリーは 1797 年にウェールズ旅行をしたリチャード・ウォーナー(Rev. Richard Warner:)を引用しながら次のように述べている。

旅籠のディナーや夕食は徒歩旅行者に許される肉体的快楽の主要なものであった。リチャード・ウォーナー師は 1797 年に、ウェールズでの宿泊費と食事代の安さに驚喜した。２人分の宿泊費と食事代はたったの５シリング、２ペンスであった。その夕食も「シタガレイ、鱒、それにグウィニアッドという高山地帯にだけ住む鱒のような魚」、そして「マトンのステーキ、野菜、すばらしいパンとチーズ」からなるものあった。[10]

ボローは南ウェールズに向かう旅の途中で、再びバラを訪れている。そのとき彼は「ホワイトライオン亭」に直行している。この旅籠こそ、彼が先回投宿した宿であった。今回もその朝食に関し、彼は驚きをもって記している。

私は正装してコーヒールームに行った。そして朝食のテーブルについた。なんという朝食であろうか！野ウサギの料理、鱒料理、調理された小エビ、普通の小エビ、缶詰のサーディン、すばらしいステーキ、卵、マフィン、大きなパン、バター、それにすばらしいお茶を忘れてはならない。これが朝食なのだ。(『ワイルド・ウェールズ』、356 頁)

ボローはまたビールに目がなかった。チェスターやスランゴスレンのビールは特に有名であった。しかし彼がバラで泊まったホワイトライオン亭で出されたエールはすばらしかった。彼はトム・ジェンキンズというウェーターにエールを注文すると、ウェーターは、極上のエールがありますと答える。ボローはスランゴスレンから取り寄せたものかと尋ねると、そのウェーターは軽蔑するような笑いを浮かべ、自家製であると答えた。彼はさっそくそれを飲んだ。

私はそれを味わってみた。そしてそれから飲み干した。そのエールは本当にすばらしいもので、私が以前に飲んだ最高のものと同等であった。コクがあり、芳醇であり、その中にあるホップの独特の風味はほとんどしなかった。見た目には、色は薄く淡く見えるが、ブランデーとほとんど同じほど強かった。(『ワイルド・ウェールズ』、257 頁)

彼は南ウェールズに行く途中で再びホワイトライオン亭に泊まり、そこで夕食の時にまたそのエールを飲んだ。食事は文句のつけようがなかったが、エールはひどかった。

「これはひどいエールだ！この夏に飲んだのとはまるで違う。トム・ジェンキインズが出してくれたのとは」と私はそのメードに言った。

「同じエールでございますよ。でも酒樽に残った最後のものです。トムがまた戻ってきて、夏のためにエールを醸造してくれるまでは、6ヶ月間そのエールはございません。でもとてもよい黒ビールならございます。それとオールソップの1級品があります」とそのメードは言った。

「オールソップのエールは7月か8八月にはよいだろうが、一〇月の終わりではほとんどだめだろうな。でも、1パイント持ってきてくれ。どんなときでも、黒ビールよりはエールの方がましだ」と私は言った。(『ワイルド・ウェールズ』、356頁)

エールには小うるさいボローであった。彼は旅の途中、いたる所でエールを飲んだ。彼に完全禁酒主義を説いても、無駄なことであった。

6

ボロー自身のエピソードから離れ、ウェールズそのものに戻ろう。ボローがウェールズ詩人の足跡を訪ねたことは先に述べたが、その他にも彼は数多くのウェールズ詩人について教えてくれる。ウェールズのシェイクスピアといわれるインタールード（田舎狂言）の作者トゥム・オル・ナント(Twm o'r Nant:1739-1810)の伝記が第 59 章に詳しく述べられ、第 60 章には彼の作品の紹介と分析が行なわれている。オワイン・グリン・ドゥールの館跡を訪れ、ボローが少年の頃に訳したグリン・ドゥールの吟唱詩人イオロ・ゴッホの詩を読み、当時の無垢な時代を追憶し、涙する場面もある。その他、15 世紀前半に活躍したスノードンのリース・コッホ(Rhys Goch Eryri)、ウェールズを代表する大詩人ダヴィッズ・アップ・グイリム(Dafydd ap Gruffydd:ff.1340-70)などが紹介されている。これら詩人に関しては、それまでの旅行記では触れられることはあまりなかった。『ワイルド・ウェールズ』ならではの話題である。

また 1854 年という時点のウェールズが描かれているという点で、その当時の記録として『ワイルド・ウェールズ』は今日大変貴重である。この紀行記はウェールズが大きく変容していく時代の証人でもある。この時代には、いわゆるスランゴスレンの貴婦人と呼ばれたエレナ・バトラー(Eleanor Butler: 1739-1829)とセアラ・ポンソンビー(Sarah Ponsonby : 1755-1831)や [11]、ベズゲラートの犬の物語 [12] が、新たにウェールズの伝説に加わった。社会面では、有料道路打ち壊し暴動であるリベカ暴動 [13] が起きた。これらもボローは旅行記のなかで取り上げている。またウェールズの産業も様変わりした。ボローはスランゴスレンに帰る夜道で見たケヴン(Cefn)の溶鉱炉の炎を次のように印象深く書いている。

私は野原を横切った。もしケヴンの溶鉱炉の光が、私の道を赤い炎で照らしてくれなかったら、杭のようなものにつまずき、6回は転んでしまったであろう。私は炭坑へと続くトラムウエイの近くで、スランゴスレンへ向かう道路に出た。溶鉱炉から2つの巨大な炎が、メラメラと空高く吹き上げられた。教会の尖塔と同じぐらいの高さの2つの煙突が、ぼんやりと照らされた。また同様に煙でかすんだ建物と、動いている人影が照らし出された。機械の出す甲高い音、シャベルの音、石炭の落下する音、それらはすべてぞっとするものであった。その炎はとても巨大なものであったので、私は自分の手のひらの細い線まで、はっきりと見ることができた。(『ワイルド・ウェールズ』、317頁)

夜空を焦がす巨大な炎は北ウェールズにわずかに残っていた製鉄所のものであった。それから数週間後、ボローは南ウェールズの製鉄業の中心地マーサー・ティドゥヴィルを訪れた。夜、マーサーにあと3マイル（4.8km）という丘の上からボローは多くの炎を見る。

丘の上にある曲がり角を廻ると、私はここかしこに炎を見た。そして南東の方向には、全体が赤く輝いている山の形をしたものがあった。私はその方向に長く続く下り坂を下りていった。それらの炎と、あの不思議な赤く輝く物体から出る光があまりにも強いので、私は道路の上の小石さえ、はっきりと見ることができた。下り坂をずっと 30 分あまり歩くと、左手に家が1軒あった。そしてその反対側に水

の音が聞こえた。それは滝であった。私はそこに行き、たっぷりと水を飲み、それから先を急いだ。さらに多くの炎が見えた。あの赤く輝く物体はますます恐ろしく見えた。それは今や少し前方の左側にそびえていた。それは溶岩のような、熱せられた巨大な物質で、丘の上部と中腹を占め、そのあちらこちらから底に向かって、ジグザグに曲がりくねりながら流れ落ちていた。私とその赤く輝く丘の間には、深い小さな渓谷があった。少しすると私は1軒の家の前に来た。するとドアに寄りかかっている男がいた。「もしもし、あの上で燃えているようなものは一体何ですか？」

「鉄を作るときに出る浮きかすでさー」(『ワイルド・ウェールズ』、502-3頁)

ケヴンの製鉄所と同様の夜景であるが、規模は全く違う。マーサーでは地域全体が製鉄所なのである。

今私は眼下に、光に溢れた谷を見た。そして下りていくと、家やトラムウエイのあるところに着いた。今や私の周りは炎だらけであった。私は不潔なぬかるみを通り、橋を渡り、やっと街路に出た。その街路から汚い通路が枝分かれしていた。私は騒々しく話をしている粗暴な顔つきをした人々の群れを通り過ぎ、彼らの誰にも話しかけることを避け、ついに誰からも教えて貰うことなく、マーサー・ティドゥヴィルのカースル・インに到着した。(『ワイルド・ウェールズ』、503頁)

翌日ボローは、マーサーに数ある製鉄所の中で、ウィリアム・クロシェーの大変有名カヴァルスヴァ(Cyfarthfa)製鉄所に行き、なんとか見学の許可を得た。見学には頭の良さそうな熟練工が付き添った。

私は巨大な溶鉱炉を見た。私は溶けた金属が流れるのを見た。私は長い展性のある真っ赤な熱い鉄が作られているのを見た。私は何百万もの火花が飛び交うのを見た。私は240馬力の蒸気機関が、巨大な車輪を驚くほどの速さで回転させているのを見た。私はあらゆる種類の恐ろしいもの音を聞いた。全体的な印象は、ただただ驚愕であった。(『ワイルド・ウェールズ』、504頁)

南ウェールズでは北ウェールズより大規模な、より近代的な製鉄業が展開されていた。ボローの驚くのも無理はなかった。工場見学の後は、マーサーの町の見学であった。彼は、マーサーは大きな町で人口も多く、ウェールズ語が話されていること、家屋は低く、粗末であり、荒い灰色の石でできていると書いている。[14]

『ワイルド・ウェールズ』には北ウェールズだけでなく、ややもすれば観光の対象から外されがちの中部および南部ウェールズの様子もまた詳しく記述されている。プリンリモン(Plynlimon)が良い例である。実はペナントはこのプリンリモンを訪れてはいない。彼は次のように書いている。

わたしはプリンリモンの巨大な丘を訪れるのを思い止まらされた。そこはまったくつまらない所で、その頂上はぬかるんでおり、荒涼としてほとんど誰も住んでいない土地の向こうにその姿が見えるということだ。(『ウェールズ旅行記』、第2巻、366頁)

プリンリモンはピクチャレスクの観点からも失格であった。19世紀初頭にそこを訪れたギルピンは風景に占める土地と水のバランスにおいて、水が圧倒的に少ないとプリンリモンに失望した。[15]

しかしボローはそのプリンリモンを訪れた。それも、そのプリンリモンにその源を発する三つの川、すなわちライドル川(Rheidol)、ワイ川(Wye)、セヴァン(Severn)の源泉巡りをするためであった。それは今までにはない新しい「観光」の姿であった。川の源泉は決して歴史上の重要な場所でもなく、古物研究の対象でもなく、また一般人の観光の対象でもない。またそれはスノードン山登頂という観光とも少し違う。またボローは学問的な調査で源泉を訪れたわけでもない。それはおそらくボローにとって、もう数少なくなった「ワイルド・ウェールズ」巡りであったのかもしれない。丘の上から見た荒涼としたプリンリモンの風景を、彼は次のように記している。

荒涼とした山岳地帯が四方に広がっている。それ

は黄褐色をした荒れ地で、所々に黒い岩石の山頂がある。生命の姿も、耕作の跡も見あたらない。見渡す限り、森ひとつなく、樹木1本さえ生えていない。もし輝く太陽がその風景を照らしていなかったら、その光景は極端なまでに重苦しいものであったであろう。(『ワイルド・ウェールズ』、425頁)

このような場所にある川の源泉を訪れるという行為は、成熟したウェールズ観光に残された最後の観光フロンティアであった。ワイルド・ウェールズはもう消滅しかけていたのであった。彼はプリンリモンに発する3つの川の源泉の水をそれぞれ飲んだ。それは彼にとってウェールズと同化する神聖な儀式であったのかもしれない。

彼のウェールズの旅はイングランドとの国境の町チェプストー(Chepstow)で終わる。そこはアイルランドの征服者として有名なストロングボーことリチャード・ドゥ・クレア(Richard FitzGilbertde Clare: 1130-1176)の生まれた城のある町である。ボローはチェプストーで1番のホテルに部屋をとり、そこでの最高の夕食を注文した後、見物に出かけた。

それから鞄を置いて、城に出かけた。その廃墟の中を小1時間、時折「ノルマン人の蹄鉄」(The Norman Horseshoe)の詩を口ずさみながら、手探りで彷徨った。それから私はワイ川に行き、ちょうど少し前に私がその川の源泉でその水を飲んだように、その川の河口から水を汲み飲んだのである。それからホテルへ戻り、夕食をとった。その後でポートワインを1本注文し、暖炉の火格子の横に足を乗せ、10時になるまでワインを飲みながら、またウェールズ語の歌を歌いながら、時間を過ごした。時間になったので勘定を払ったが、相当の額になっていた。それから鞄を背負い、鉄道の駅へ行き、1等乗車券を買い、快適な車両に乗りロンドンに向かった。(『ワイルド・ウェールズ』、527-8頁)

ボローはウェールズの旅の最後を、ワイ川の源泉で飲んだ水を再びその河口で飲むという象徴的な行為と、贅沢な食事とワインで締めくくっている。もっとも美しい川と誇るにたるワイ川の水を源泉と河口で飲むことにより、ボローのなかでウェールズは永遠のものとなった。徒歩で旅行すべき神聖なウェールズを離れれば、汽車もまた便利な乗り物であった。彼は翌朝4時にロンドンに到着した。

注

1. Gerald of Wales, *The Journey through Wales and The Description of Wales* (translated by Lewis Thorpe, Penguin Books,1978), pp.236-7.
2 George Borrow, *Wild Wales—Its People, Language and Scenery* (John Jones, 1998), p.175. 本文中では『ワイルド・ウェールズ』と記す。
3. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 180.
4. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 33.
5. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 45.
6. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 144.
7 『ワイルド・ウェールズ』、p. 211.
8. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 212.
9. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 256.
10. Donna Landry, *The Invention of the Countryside: Hunting, Walking and Ecology in English Literature, 1671-1831* (Palgrave, 2001), p. 127
11. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 42, p. 59, pp. 266-7.を見よ。
12. 『ワイルド・ウェールズ』、pp. 238-9.
13. 『ワイルド・ウェールズ』、pp. 86-7.
14. 『ワイルド・ウェールズ』、p. 505.
15. Ian Fleming, *Glyndwr's First Victory* (Y Lolfa, 2001), p.17.

(平成15年3月19日受理)